

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03276

研究課題名(和文)近代欧米における制度の政治哲学

研究課題名(英文)Modern Political Philosophy and Institutions

研究代表者

小田川 大典 (ODAGAWA, Daisuke)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：60284056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：モンテスキュー、デイヴィッド・ヒューム、ジョン・アダムズ、ジョン・スチュアート・ミル、オットー・フォン・ギールケらの著作の解説を中心に近代欧米における制度の政治哲学の展開について思想的、理論的な研究を行ない、社会思想史学会(2015、2016、2017)で「制度の政治思想史」セッションを開催した。また関連する分科会を日本政治学会(2016)で行なった。

研究成果の概要(英文)：We studied institutionalist political philosophy of Charles-Louis de Secondat, baron de la Brede et de Montesquieu, David Hume, John Stuart Mill and Otto von Gierke and organized research workshops on this theme at the SHST annual meetings ("Modern Political Philosophy and Institutions" in 2015, 2016 and 2017) and the JPSA annual meeting (2016).

研究分野：政治学

キーワード：思想史 代表制 連邦制 国民国家 デモクラシー 社会有機体説

## 1. 研究開始当初の背景

政治研究の目的のひとつは、政治についての制度論的考察を行なうための手がかりを提供することにある。だが近年の様々な研究動向は、こうした制度論研究にとって、必ずしも好ましい状況を提供するものとは言い難い。具体的にいえば、近年の研究には、制度論研究を困難にする背景が、少なくとも二つ認められる。

(1) 第一の背景としては、多元主義論の隆盛によって、研究の対象となる政治が社会全体の非制度的な次元へと拡散し、政治制度に固有の公的役割を論じることが容易ではなくなったという事情が挙げられる（早川誠『政治の隘路』創文社、2001年を参照）。実際、例えば近年のデモクラシー論においても、伝統的には議会の中での制度的な「審議」を指していた "deliberation" という語が、ハーバースの討議倫理の影響の下、一般市民の理性的な「熟議」という非制度的な意味で盛んに用いられるようになっていく（田村哲樹『熟議の理由』勁草書房、2008年を参照）。たしかにその結果、一般市民のインフォーマルな「熟議」についての議論は深められたといえよう。しかし、その一方で、議会での制度的「審議」の固有の特質についての議論が後退を余儀なくされたといっても、おそらく過言ではない。

(2) 第二の背景は、近年の政治哲学研究全般に見られる、歴史研究と理論研究の乖離である。すなわち一方ではケンブリッジ学派のような歴史的文脈の中で形成される政治的言説の特殊性や偶然性を強調する歴史研究が行われ（例：Q・スキナーほか『思想史とはなにか』岩波書店、1999年）、他方では分析哲学の影響の下、正義や自由といった「概念」の分析を駆使して政策論的「構想」を理路整然と提示する規範理論の研究が行われている（例：P. Pettit, *A Theory of Freedom*, Oxford University Press, 2001）。しかしながら、R・ローティが「歴史的再構成」対「合理的再構成」と呼んだこのアプローチの対立は、制度をめぐる「歴史的」考察と「合理的」考察の間に、ある種の隔絶をもたらしかねない（『連帯と自由の哲学』岩波書店、1999年）。

政治研究が社会全体の非制度的な次元へと拡散する傾向に抗しつつ、近代欧米の政治哲学における制度論的思考について、歴史研究と理論研究の対話を試みる。これが本研究の問題意識である。

## 2. 研究の目的

(1) 政治理論における制度論 理論的考察：近年の研究成果を踏まえつつ、代表制、二院制、政党制、連邦制、国際制度などをめぐる制度論について理論的考察を行う。例えば連邦国家については、従来、これを「統一

国家としての連邦国家」の範型で捉え、EUへの適用の困難を強調する見解が有力であったが、政治思想史研究の中で明らかになってきた同概念の歴史的な多様性を念頭におくならば、これまで類型化が不可能とされてきた「政府間組織でも統一国家でもない」EUの政体をめぐり、より精緻な類型化の可能性を探ることができるだろう。

(2) 政治思想史における制度論 系譜学的考察：通時的な歴史的文脈と共時的な同時代的文脈を踏まえつつ、代表制、政党制、二院制、連邦制、連邦国家、国際制度など、政治思想史における様々な制度をめぐる議論の動向について、系譜学的な観点から比較研究を行う。しばしば制度論は、具体的な争点との関連で個別に論じられがちであるが、国際制度の理論的展開を古代から近代まで跡づけた Richard Tuck, *The Rights of War and Peace: Political Thought and the International Order from Grotius to Kant*, Oxford University Press, 2001 が示すように、思想史の中での制度論は、個別具体的な争点に限定されない、多様な歴史的文脈と同時代的文脈を背景として論じられるのがつねであった。そうした様々な文脈を明確にすることで、様々な制度論の可能性とその限界が明らかになるであろう。

(3) 古典的政治思想家における制度論 歴史的考察：グロティウス、モンテスキュー、ヒューム、バーク、アダムズ、ミルといった、古典的政治思想家の制度論について、近年の研究成果を踏まえながら、丁寧な一次文献の解読を行なう。一見、現代的な制度論の研究とは無縁のようだが、例えば我が国におけるいわゆる「ねじれ国家」の問題を制度論の問題として考察する上で、政党制や二院制、更には政府内における様々な対立についてヒューム、バーク、フェデラリストたちが展開した議論は極めて豊かな示唆を与えるものであり、実際、例えば、アダムズとトマス・ジェファソンの代表観および国家観をめぐる対立を軸に、党派抗争が政党制に、地域間対立が連邦制に収斂していく理論的契機を歴史的に検討した論文集 J. Horn and J. E. Lewis, ed., *The Revolution of 1800*, University of Virginia Press, 2002 や、政党政治の理論的淵源をバークに求める通説的な理解に対して、政治対立を肯定的にとらえた思想の系譜を辿ることでこの問題に接近を試みる C. Robbins, "'Discordant Parties', " *Political Science Quarterly*, 73, 1958 や John A. W. Gunn, *Factions No More*, Frank Cass & Co, 1972; Marco Geuna, " Republicanism and Commercial Society in the Scottish Enlightenment, " Martin van Gelderen and Quentin Skinner eds., *Republicanism: A Shared European Heritage*, Volume 2, Cambridge University Press, 2002

などは、対立や抗争を重視する現代のデモクラシー論の一潮流とも関連する重要な思想史研究の成果である。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下の三つを軸として、各メンバーの個人研究と共同研究を組織する。また、定期的にまとまった研究発表を行なうため、引き続き、日本政治学会、社会思想史学会等において、ゲストスピーカーを招き、分科会・セッションを企画・実施する。

(1)政治理論における制度論 理論的考察：近年の政治思想史研究の成果を踏まえつつ、代表制、二院制、政党制、連邦制、国際制度等をめぐる現代の制度論について理論的考察を行う。

(2)政治思想史における制度論 系譜学的考察：通時的な歴史的文脈と共時的な同時代的文脈を踏まえつつ、代表制、政党制、二院制、連邦制、連邦国家、国際制度など、政治思想史における様々な制度をめぐる議論の動向について、系譜学的な観点から比較研究を行う。

(3)古典的政治思想家における制度論 歴史的考察：グロティウス、モンテスキュー、ヒューム、パーク、アダムズ、ミルといった、古典的政治思想家の制度論について、近年の研究成果を踏まえながら、丁寧な一次文献の解読を行なう。

### 4. 研究成果

(1)平成 27 (2015) 年度は、研究の方法に記した三つのうち、主に(2)系譜学的考察と(3)歴史的考察に取り組んだ。

政治思想学会(武蔵野大学,5月23日)のシンポジウム「秩序形成をめぐる意志と理性」の司会と報告のとりまとめを犬塚が担当した。

日本政治学会(千葉大学西千葉キャンパス,10月10・11日)では分科会「革命と政治」において、石川が研究報告「アメリカ革命と正統の創設」を行なった。

社会思想史学会(関西大学千里山キャンパス,11月7・8日)では、村田玲氏(青山学院大学非常勤講師)、石黒盛久氏(金沢大学)、鹿子生浩輝氏(九州女子大非常勤講師)を招いて分科会「制度の政治思想史：鹿子生浩樹『征服と自由：マキャヴェッリの政治思想とルネサンス・フィレンツェ』(風行社,2013年)を読む」を開催し、安武が司会を、犬塚が討論者を担当した。また、市民社会論をめぐる二つのシンポジウムの企画・運営に、小田川と犬塚が参加した。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会(同志社

大学今出川キャンパス,11月21日)では、シンポジウム「神はどこにおられるのか：ヴィクトリア時代知識人にとっての信仰」において小田川が研究報告「ヴィクトリア朝「教養」論の宗教的背景：ユニテリアニズムとリベラル・アングリカニズムを中心に」を行なった。また日本イギリス哲学会(学習院大学目白キャンパス,2016年3月29日)では、シンポジウム「イギリス思想における常識と啓蒙の系譜：18世紀スコットランドから20世紀ケンブリッジへ」の討論者を石川が担当した。また同学会関西西部会(キャンパスプラザ京都,12月19日)で小田川が研究報告「ヴィクトリア期における宗教と教養：J・S・ミルとM・アーノルド」を行なった。

(2)平成 28 (2016) 年度は、研究の方法に記した三つのうち、主に(1)理論的考察と(2)系譜学的考察に取り組んだ。

社会思想史学会(中央大学後楽園キャンパス,2016年10月30日)でセッション「制度の政治思想史：松元雅和『応用政治哲学：方法論の探究』(風行社,2015年)を読む」を開催し、井上彰氏(立命館大学)に報告を、松元雅和氏(関西大学)と山岡龍一氏(放送大学)に討論をお願いし、犬塚がコメント報告を担当した。

日本政治学会(立命館大学大阪いばらきキャンパス,2016年10月2日)で分科会「政治思想史のナラティブ：歴史叙述と素材選択」を開催し、関谷昇氏(千葉大学)と竹澤祐丈氏(京都大学)に報告をお願いし、司会を小田川が、討論を犬塚と安武が担当した。

その他、個別の論文等として、小田川が「パーク『崇高と美』における生理学・倫理学・美学」を堀田新五郎・森川輝一編『連続講義政治思想と文学』(ナカニシヤ出版,2017)に、犬塚が「政治思想史の通史叙述の形成期におけるパーク解釈の変転」を『法学志林』114(2017)に、安武が「フランス初期近代における市民社会論」を杉田孝夫・中村孝文編『市民社会論』(おうふう出版,2016)に、石川が「北アメリカ植民地における人権概念の契機」を『ピューリタニズム研究』第11号(2017年3月)に、遠藤が"Die Bundesstaatslehre Otto von Gierkes"を*Historische Demokratieforschung* (2017)に寄稿した。

(3)平成 29 (2017) 年度は、研究の方法に記した三つのうち、主に(1)理論的考察」と(3)歴史的考察に取り組んだ。

社会思想史学会(京都大学吉田キャンパス,2017年11月5日)でセッション「制度の政治思想史：政治哲学研究と政治思想史研究の交錯」を実施し、安武が司会を、石黒盛久氏(金沢大学)と小田川が報告を、村田玲氏(青山学院大学非常勤講師)と田中将人氏(早稲

田大学)が討論を担当した。

石川が政治理論研究会(法政大学現代法研究所, 2018年2月21日)で研究報告「ジョン・アダムズの混合政体論における近世と近代」を, 日本イギリス哲学学会第42回研究大会(武蔵野大学有明キャンパス, 2018年3月28日)で研究報告「イギリス領北アメリカ植民地の指導者層にとっての常識哲学」を行なった。また, 遠藤が北大政治研究会(北海道大学法学部, 2017年7月28日)で研究報告「フーゴ・プロイスと大統領緊急権: ヴァイマル憲法48条をめぐる」を行なった。

その他, 個別の論文等として, 小田川が「J・S・ミルにおける教養と宗教: 『宗教三論』解説」を『岡山大学法学会雑誌』67巻3・4号(2018)に, 犬塚が「歴史の理論家としてのポーコック: その知的軌跡における政治・多元性・批判的知性の擁護」を『思想』1117号(岩波書店, 2017)に, 石川が「書評: 遠藤泰生編『近代アメリカの公共圏—デモクラシーの政治文化史』」を東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター編『アメリカ太平洋研究』11巻(2018)に, 遠藤が「デモクラシーはなぜ崩壊したのか: ドイツ・ワイマール共和国の経験に学ぶ」を『松山大学論集』29巻3号(2017)に寄稿した。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

小田川大典, 「J・S・ミルにおける教養と宗教: 『宗教三論』解説」, 『岡山大学法学会雑誌』, 査読無, 67巻, 2018, pp.457-474.

石川敬史, 「北アメリカ植民地における人権概念の契機」, 『ピューリタニズム研究』, 査読無, 11号, 2017, pp.21-27.

遠藤泰弘, 「デモクラシーはなぜ崩壊したのか: ドイツ・ワイマール共和国の経験に学ぶ」を『松山大学論集』, 査読無, 29巻, 2017, pp.181-198.

INUZUKA Hajime, “*Seiji-tetsugaku-teki kōsatsu: riberaru to sōsharu no aida (Papers on Political Philosophy: Between Liberal and Social)*,” *Social Science Japan Journal*, 査読無, Volume 20 Issue 2, 2017, pp.287-290.

犬塚元, 「政治思想の「空間論的転回」: 土地・空間・場所をめぐる震災後の政治学的課題を理解するために」, 『立命館言語文化研究』, 査読無, 29巻, 2017, pp.67-84.

犬塚元, 「政治思想史の通史叙述の形成期におけるバーク解釈の変転: 学説史において, バークはいつから保守主義の創設者とされ

たか」, 『法学志林』, 査読無, 114号, 2017, pp.71-84.

犬塚元, 「歴史の理論家としてのポーコック: その知的軌跡における政治・多元性・批判的知性の擁護」, 『思想』, 査読無, 1117号, 2017, pp.129-159.

犬塚元, 「リヴィジニズムのなかのキリスト教政治思想: 原田健二郎『ケンブリッジ・プラトン主義』に寄せて」, 『創文』, 査読無, 2015年春号, 2015, pp.10-12.

〔学会発表〕(計8件)

遠藤泰弘, 「フーゴ・プロイスと大統領緊急権: ヴァイマル憲法48条をめぐる」, 北大政治研究会(北海道大学法学部), 2018.

犬塚元, 「データフィケーションの時代における思想・哲学研究: デジタルデータ, デジタルツール(検索, 計量分析)をどう活用できるか」, 日本イギリス哲学学会, 2018.

石川敬史, 「イギリス領北アメリカ植民地の指導者層にとっての常識哲学」, 日本イギリス哲学学会, 2018.

石川敬史, 「ジョン・アダムズの混合政体論における近世と近代」, 政治理論研究会(法政大学現代法研究所), 2018.

小田川大典, 「ロールズ政治哲学の生成と構造: 田中将人『ロールズの政治哲学: 差異の神義論=正義論』(風行社, 2017)を読む」, 社会思想史学会, 2017.

小田川大典, 「ヴィクトリア期における宗教と教養: J・S・ミルとM・アーノルド」, 日本イギリス哲学学会, 2016.

小田川大典, 「ヴィクトリア朝「教養」論の宗教的背景: ユニテリアニズムとリベラル・アングリカニズムを中心に」, 日本ヴィクトリア朝文化研究学会, 2016.

石川敬史, 「アメリカ革命と正統の創設」, 日本政治学会, 2015.

〔図書〕(計5件)

Detlef Lehnert(Hg.), Ewald Grothe, Yasuhiro Endo, Christoph Müller, Arnel Le Divillec, Detlef Lehnert, Tamara Ehs, Heinrich Neisser, Ulrike Lembke, Dian Schefold, Kathrin Groh, Hans-Christof Kraus, Robert Chr. van Ooyen, Peter Steinbach, Metropol Verlag, *Verfassungsdenker: Deutschland und Österreich 1870-1970*, 2017, 360 (63-75).

中澤信彦(編著), 桑島秀樹(編著), 犬塚

元, 真嶋正己, 苅谷千尋, 佐藤空, 立川潔, 高橋和則, 土井美德, 角田俊男, 昭和堂, 『バーク読本』, 2017, 304 (20-41)。

堀田新五郎 (編著), 森川輝一 (編著), 小野紀明, 平野啓一郎, 仁井田崇, 川村文重, 小田川大典, 加藤哲理, 乙部延剛, ナカニシヤ出版, 『講義 政治思想と文学』, 2017, 400 (123-152)。

高野清弘 (編著), 土佐和生 (編著), 西山隆行 (編著), 安武真隆, 長谷川一年, 大津真作, 米原謙, 片野真佐子, 安西敏三, 市田正夫, 寺尾建, 土佐和生, 北村亘, 西山隆行, 樋口騰迪, 行路社, 『知的公共圏復権の試み』, 2016, 354 (13-38)。

モンテスキュー, 井上堯裕 (翻訳), 安武真隆, 中央公論新社, 『中公クラシック モンテスキュー『法の精神』』, 2016, 356 (1-26)。

〔その他〕

「制度の政治思想史」ウェブサイト

[http://odg.la.coocan.jp/political\\_thought/](http://odg.la.coocan.jp/political_thought/)

username: political

password: thought

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小田川 大典 (ODAGAWA DAISUKE)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授  
研究者番号: 60284056

### (2) 研究分担者

安武 真隆 (YASUTAKE MASATAKA)

関西大学・政策創造学部・教授

研究者番号: 00284472

犬塚 元 (INUZUKA HAJIME)

法政大学・法学部・教授

研究者番号: 30313224

石川 敬史 (ISHIKAWA TAKAFUMI)

帝京大学・文学部・准教授

研究者番号: 40374178

遠藤 泰弘 (ENDO YASUHIRO)

松山大学・法学部・教授

研究者番号: 30374177

### (3) 研究協力者

なし